

天守台の整備を行いました。

昨年度に引き続き、天守台石垣の間詰石補修工事を行いました。昨年度は天守台の地下部（穴蔵部分）を中心に補修を行いましたが、今年度は、天守台外周部分の石垣を対象として実施しました。

間詰石は、石垣内部の栗石の流出を防ぎ、石垣が不安定な状態にならないために必要なものです。天守台部分の石垣は間詰石が各所で欠落し、内部の栗石が表出していましたが、今年度で、天守台の全ての石垣に間詰石が補修されました（写真10）。

また、天守台穴蔵から1階上がるための石段については、廃城以降につくられたものですが、平成24年3月に一部の石が崩落し、危険な状態であったため、今年度、積み直しを行いました（写真7）。積み直しにあたり石段を解体したところ、天守の礎石がすべて残っていました（写真8）。古絵図（写真9）と照らし合わせると、柱の位置と礎石の配列が一致していることがわかります。



写真7 天守台へ上がる石段（修復後）



写真8 天守台穴蔵の航空写真（右が北）点線が修復した石段部分

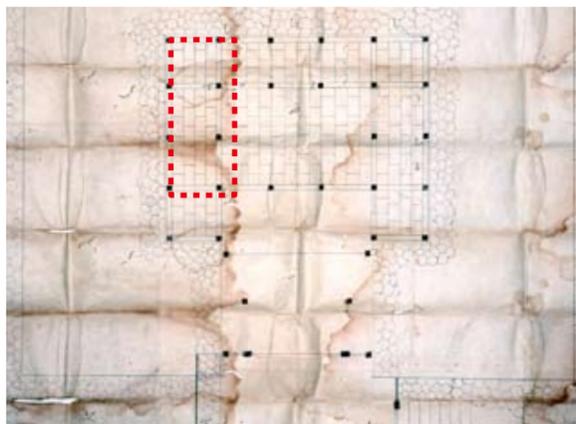


写真9 津山城天守指図（地下）点線が修復した石段部分



写真10 間詰石補修後（天守台東面北半部）

模擬天守が出現！

史跡津山城跡整備事業とは直接関連しませんが、美作国建国1300年にあたる2013年には、建国1300年記念事業として、各地で様々な企画・イベントなどが行われました。

その一つとして、発砲スチロールとベニヤ板などを用いた模擬天守がつけられました。

大きさは約2分の1ですが、忠実に復元されたもので、在りし日の津山城を彷彿とさせるものでした。

模擬天守の展示期間は平成25年8月2日から18日でしたが、来園者の方だけでなく、多くの人に津山城天守を印象付けるものになったのではないのでしょうか。



模擬天守（南東から）



備中櫓（右）と模擬天守

発行年月日 平成26年3月31日
編集・発行 津山市教育委員会 文化課
〒708-0824 岡山県津山市沼600-1
TEL (0868) 24-8413
印刷 (有) 弘文社

冠木門跡の発掘調査を実施しました。

津山市教育委員会文化課では、史跡津山城跡保存整備事業の一環として、通路部分の調査を年次的に行っています。平成25年度は、冠木門の構造や規模を把握するための発掘調査を実施しました。

発掘調査では、これまで不明であった冠木門の構造の一部や、門が築造される際の造成の様子などが明らかになりました。

このほか、天守台の間詰石補修工事（2年目）及び天守台の石段修復工事を実施しました。

今回は、これらの事業概要を中心にご紹介します。



写真1 発掘された冠木門跡（西から）

冠木門跡の発掘調査を実施しました。

冠木門について

冠木門は、津山城の三ノ丸にいたる通路上にある門で、両側を高石垣に挟まれたところに位置します。門を入ると石垣に囲まれた四角い空間が内側に形成されています。これは枡形虎口といい、城の守るための重要な構造です。枡形虎口の南東部にはもとは番所があり、ここで入城者の見張りをしていました(写真2・3)。

門の構造は、絵図によって描かれ方が異なりますが、両側に低い袖石垣と土塀があり、両側の高石垣との間を塞いでいたと考えられます(写真2、写真4左下CG)。門の形式については、2本の本柱とその控柱の合計4本柱であることが平面図などから判明しています。上部構造は、絵図資料では櫓門、薬医門あるいは高麗門が描かれたものが多くみられますが、文献等からは、高麗門の可能性が高いと推測されます。

明治7年～8年、城の取り壊しの際に、冠木門についても取り壊されたと考えられます。

調査の概要

(1) 北調査区(写真1～5)

調査区東側で、築城時の地表面と考えられる面がみわかりました。この面は、東から西に向かって緩やかに傾斜していることがわかりました(写真1①)。

調査区西側は、地表面と考えられる面はみられませんでした。現在の門から約1m西のところ、直径約80cm、厚さ20cmの大きな石が検出されました(写真1②)。石は上面が平らで、石の下には河原石が詰められ

ています。その西側には、幅50cm、厚さ10cm程度の板状の石が2個重なるようにしてみられ、さらに50cm西には、同様の板状の石が最大7段積まれており、板状の石の間やその周囲には、河原石が充填されていました(写真1③)。板状の石は、整ってはいませんが西側に面をもっています。築城時の地表面の高さとの関係から、大きな石は地表面に表出しており、石積みは、地下に埋まっていたと考えられます。

では、調査区西半部でみつかった大きな石とその前面に位置する板状の石を積んだもの(以下、「石積み」とします)は、どのような性格をもつものなのでしょうか。可能性としては2つ考えられます。

①石垣の下に河原石を置き、安定させていることから、北調査区中央の石は冠木門の礎石の一つである。

②冠木門は両脇に袖石垣をもつものであったことから、中央の石は袖石垣を構成する石のひとつであり、石積みは袖石垣の基礎として築かれていたものである。

①の場合、北調査区中央の石が門の礎石であることから、袖石垣は石よりも北側にあったこととなります。しかし、この場合、板状の石積みがどのような性格のものであるか、検討する必要があります。

②の場合、調査区中央の石は袖石垣の根石付近の石であり、石積みは門の基礎の遺構と考えられます。門の柱位置は中央の石よりも南側であったと推測されます。

調査区の北西端では、一部で地山の岩盤が確認されました(写真1④点線)。岩盤は南に向かって大きく下がっていることがわかりました。

(2) 南調査区(西半部)(写真4・6)



写真2 冠木門枡形虎口部分
津山絵図(元禄10年(1697)頃)



写真3 現在の冠木門枡形虎口(左が北)



写真4 発掘調査区的全景(上が北)

北調査区西半部に南接して設定した調査区です。現地表面から1.3～1.5m下がったところで築城時の地表面を検出しましたが、明確な遺構は確認されませんでした。また、地山を確認するためにさらに掘削したところ、礫と粘質土が交互に埋められている状況が確認されました。この互層は築城時の整地層から1.6m下がったところまで確認できましたが、さらに下に続いています。

これは、築城時の造成土と考えられることから、冠木門が築かれた一帯は谷部であり、そこに大規模な造成を行って門が築かれたということになります。

(3) 南調査区(東半部)



写真5 直径80cmの石(中央やや左)と
石積み遺構(中央)

南西調査区から現在の門を隔てて東側に設定した調査区です。築城時の整地面と考えられるところまで掘削を行いました。明確な遺構は確認できませんでした。

まとめ

今回の発掘調査では、冠木門の正確な規模や、柱の位置などを明らかにすることはできませんでしたが、門の築造の際に行われた造成の状況や、築城時のものと考えられる地表面を確認することができました。

次年度は、門の南半分の調査を行う予定です。今回の調査結果とあわせ、冠木門の構造や、周辺の地形の様相などが詳細に把握できればと考えています。



写真6 南調査区西半部
築城時の整地面(矢印)と造成土